

「新之助」生育速報 No. 6

平成29年7月21日
村上農業普及指導センター

1 生育調査ほ・実証ほにおける生育状況（7月20日現在）

生育概況

草丈:並 茎数:並 葉数:やや遅い 葉色:並

- 全生育調査項目において、生育差が大きくなっている。
- 幼穂形成期が近づいており、管内平均で7月26日頃と予想している。
ただし、幼穂形成期が早いところで7月22日頃のほ場もある。
- 葉いもちの発生が確認**された。

○新之助生育調査ほ・実証ほの調査結果（7月20日現在）

調査場所	田植日	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	葉色 (SPAD)
関川村上関（関川）	5月19日	60	530	12.3	35.3
村上市牛屋（神林）	5月15日	61	405	12.6	30.7
村上市十川（朝日）	5月15日	66	562	11.7	33.7
平均	5月17日	62	499	12.2	33.2
指標値	5月15日	58	540	12.7	34.0
【参考：前年平均】	5月17日	66	493	12.7	35.7

2 今後の技術対策

当面の管理のポイント

◎幼穂形成期の確認

- ・**幼穂形成期（幼穂長が平均1mm以上となった時期：出穂の23日前）を必ず確認し、穂肥施用が遅れないよう準備する。**

（※ 現在の予想では、幼穂形成期は、早いところで7月22日頃、管内平均で7月26日頃）

◎穂肥施用

- ・穂肥については、**出穂前21日～18日（1回目：幼穂長5～10mm）と12～10日前（2回目）**の2回に分けて施用する。
- ・穂肥量は、**1回当たり1kg/10aとし、合計2kg/10a施用を基本**とするが、地力や生育状況、気象予報から判断して、**1回当たり1.5kg/10aを上限**に施用量を調節し栄養凋落を防止する。
- ・出穂期10日前以降の穂肥は、食味を低下させるので原則施用しないが、**異常高温（猛暑）で栄養凋落が予想される場合には、追加の穂肥も検討する。**
- ・有機質100%肥料での穂肥施用はしない。

◎水管理

- ・ 中干しを終了させ、間断かん水とし、幼穂形成期以降は飽水管理とする。特に稲体は減数分裂期から出穂・開花期にかけて最も水を必要とするので水が不足しないようにする。
- ・ 異常高温、強風、フェーン時には速やかに湛水し、稲体の急激な蒸散防止に努める。
- ・ 輪番給水地域は、気象予報等に十分注意し、異常気象が予想される場合は給水可能な日にあらかじめ十分湛水するなど事前に対応できるよう水管理に努める。

◎いもち病対策

- ・ 葉いもちの発生が確認された。いもち病に非常に弱いため、常にほ場をよく観察し、葉いもちの発病を認めた場合には、直ちに防除する。
- ・ 穂いもち防除は、葉いもちの発生がない場合でも、出穂前の適期に粒剤を水面施用するか、又は出穂期の状況に合わせ、粉・液剤で2回（出穂期直前と穂揃い期）の予防散布を実施する。
- ・ 共同防除は、新之助の防除適期とならない場合が多いので、その場合には、新之助に合わせた防除対応を行う。

◎カメムシ対策

- ・ 県病害虫防除所から「カメムシ類による斑点米多発生注意報」が発表（7/13）された。
- ・ 薬剤防除とともに、カメムシ類の住み処をなくすため、農道・畦畔の定期的な草刈りと本田内のヒエやホタルイなどの雑草を取りこぼさない。